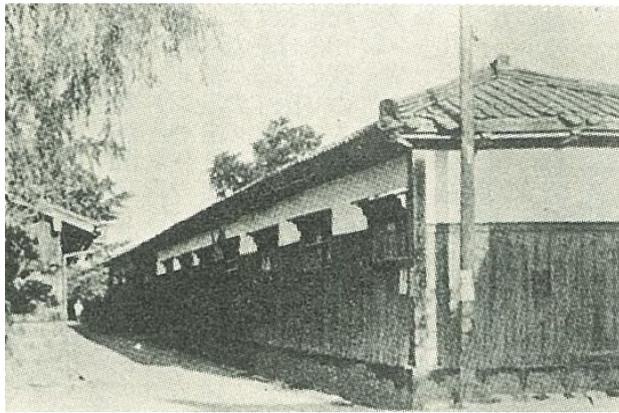


# 医学教育の芽生え

## 防長医学教育のはじまり

享保4(1719)年、萩藩校「明倫館」が創設され、藩士子弟の教育は大きく進展した。教授陣の中には医家もいたが、医学教育は行われていなかった。19世紀に入ると三田尻で、佐伯玄厚、杉山宗立らによって蘭学の研究がはじめられ、文政6(1823)年には、徳山藩が藩校「鳴鳳館」内に医学館を併置して医学の講義を開始した。ドイツの医家シーボルトが長



好生堂長屋門 (『萩市史』より)

崎に渡来したのもこの年であった。

萩藩では、天保10(1839)年、大阪や江戸で蘭学を修めた青木周弼が藩医となり、翌年、医学所が設立され、医学教育が行われるようになった。この医学所は「好生館」、「好生堂」と改称し、明倫館に移された。慶応2(1866)年には、藩政府の山口移転にともない、医学教育機関である好生堂も山口に移され、山口好生堂と萩の分館に分かれた。

## 県立医学校の創設と廃止

明治維新後、新政府によって旧体制から新体制へとさまざまな再編が図られる中、医科学教育にも変化がもたらされた。明治5(1872)年には、全国に先駆けて医術試験である「壬申考試」が山口県で施行された。同年、県は下関に赤間関医学校を開設した。

幕末に医学教育の中心をなした、山口好生堂は山口県立山口医院と改称し、明治7年に山口から三田尻に移され、山口県立華浦医学校となった。明治9年、県立赤間関医学校が廃止され、華浦医学校に統合されたが、翌年には県の財政難によりこの華浦医学校も



華浦医学校の校舎と生徒

(『山口大学医学部50周年記念誌』より)

私学化された。明治13年に、華浦医学校は山口県医学校として再興したが、明治16年には廃校となった。

明治20年、県内各地の医師たちは県の医療体制の強化と医療水準の向上を図るため、山口県医会大集会を開催し、明治42年には山口県医師会を設立した。しかしながら、医師養成のための教育機関を復活させるまでには至らなかった。